様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７０４

研究課題名（和文）日本人英語学習者の形容詞コロケーションはなぜ不自然なのか

研究課題名（英文）Why do Japanese EFL learners generate atypical erroneous adjective collocations?

研究代表者
内田　富男（Uchida, Tomio）

明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：５０５１３８５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：英語学習者の不自然な形容詞コロケーションの産出原因を明らかにするために、形容詞想起調査とコーパス分析等を行った。学習者は産出語彙が少なく、典型となる英語の連続体も十分に蓄積されていないため、母語を参照し、訳語の組み合わせを英訳する。また、品詞選択にも問題を抱えている。形容詞とその共起語相互のコロケーション知識、適切な品詞を選択する語彙知識、典型的なコロケーションを指導することが必要性である。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reveal causes of atypical erroneous adjective collocations in learner English. Writing samples by Japanese EFL learners in learner corpora, JEFFL Corpus (e.g., Tono 2007) and part of ICNALE (e.g., Ishikawa 2013), were investigated and analyzed quantitatively and qualitatively. A corpus analysis and NS informant research as well as an analysis of a word finding test were conducted.
Results revealed that the learners' repertoire is insufficient and learners tend to overuse a few basic adjectives (CEFR-J A level). There is also a tendency to misuse adjectives, referring mostly to L1 lexical and collocational knowledge. Another problem the learners have is their deficient knowledge of word class. The necessities of expanding adjectives in a productive way, fostering the active knowledges and skills to select appropriate parts of speech in generating sentences in English, and the need of teaching typical collocations as productive vocabulary are implied as a result.

研究分野：英語教育

キーワード：形容詞　母語参照　産出語彙　コロケーション知識　コーパス分析　CEFR　CEFR-J Wordlist　語想起調査

１．研究開始当初の背景

非英語母語話者が生成する英語のコロケーションはなぜ不自然なのか、という疑問に対して、従来、誤用分析等はいくつもの答えを示してきたが、なぜそのようなコロケーションを産出するのか、という原因については明らかにしていない。

本研究では、非英語母語話者（以下、学習者）が、英語母語話者とは異なるコロケーション（異形コロケーション）を創出してしまう原因を追究することを課題とした。研究計画・立案の当初、先行研究を踏まえて推測された原因の一つは母語干渉の問題であった。研究手法としては、主に学習者コーパスにおける用例の分析を中心に進めることとした。また、収集されたデータの質的違いを踏まえて、コーパスに基づく量的研究法に加え、学習の用例を資料とした英語母語話者によるインフォーマント調査を行うこととした。さらに、研究者による用例の質的分析方法を併用し、多面的に捉えることができるだろうと考えた。

また、コロケーションの構成語のレベルを限定することで、焦点を絞ってデータを観察することができると考え、当初、ヨーロッパ共通参照枠(CEFR)英語版の English Profile の一部である English Vocabulary Profile という教育語彙リストの A1 レベル及び A2 レベルの語彙を中心に検証することとした。

本研究では、従来、研究例が極めて少ない形容詞を含むコロケーションに注目した。研究面に加えて、教育面でも形容詞は教師の関心が薄く、十分に教育がなされていないことから、本研究の成果を実践に活かすべく、検証結果をもとに、日本人学習者に最適な語彙・コロケーションの学習・指導法や教材作成等への実践的示唆を得ることも本研究の重要な課題とした。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本人学習者が産出する形容詞コロケーションの特徴を記述し、不自然なコロケーション産出の原因を明らかにすることである。コロケーションにおける語選択と語結合の分析を通して、逸脱の原因を追究する。そうして第２言語語彙習得研究への知見を与え、日本人に最適な発信型語彙学習法・教材の開発のための示唆を得る。研究設問は、1)学習者はどのようなコロケーションを産出し、その特徴は何か、2)上記 1)は習得レベル・学習歴とどう関係するのか、3) 特徴的コロケーション産出における語選択・語結合の際に L1 を参照するのか、4)L1 影響は L2 語彙の発達に連れ、減少するのか、5) 上記 1)から 4)はどのような語彙・コロケーションにおいて最も顕著に現れるのか。

３．研究の方法

本研究では、二つの学習者コーパスから形容詞、及び形容詞を含む用例を文単位で抽出した。初中級レベルのデータとして中高生の 1 万人分の英作文コーパスである Japanese EFL Learner Corpus[JEFLL Corpus](投野 2007 他）と、大学生の英語データである The International Corpus Network of Asian Learners of English[ICNALE]（石川 2013 他）のうちエッセイのデータを使用した。手順は、1)English Vocabulary Profile(英語 CEFR)からの分析対象とするコロケーション選定のための形容詞一覧作成（後に、CEFR-J 付属の Wordlist に変更し、CEFR-J の A1 及び A2 レベル(CEFR)の基本形容詞を含む英語コロケーションを検証)、2)形容詞を含む学習者用例の収集とコロケーションのレパートリーの記述、3)ICNALE の英語母語話者データを分析、4)英語教師のインフォーマント調査を実施、5)研究者によるコーパス用例の質的分析を、6)小規模な語想起実験、を行った。なお、6)については、使用した学習コーパスの用例は、データ収集の際のタスクの影響、特に書くトピックにより使用される形容詞は自然な産出とは言い難い点が限界となる。そこでトピックの影響がない方法として、6)の形容詞の語想起課題を学習者に課した。これは、思いつく限り多くの形容詞を用紙に書かせるなタスクである。なお、確認のために訳語も書かせた。英語力の要因を鑑み、被験者は異なる大学に在籍する高学力群(n=21)と低学力群(n=55)の 2 群で、授業内に同一条件で実施した。

４．研究成果

(1)学習者コーパスに出現する形容詞の検証

①JEFLL　Corpus の場合

JEFLL Corpus に 2 回以上出現する形容詞（タイプ 425、トークン 35,223)は全て CEFR-J A レベルで、著しく偏りが見られる。頻度上位 14 位までの語で全体のおよそ 50%を占めている(表 1)。しかも数量形容詞(many*, much*)が上位 3 位までに来ており、占有率も高いため、記述形容詞(descriptive adjective)は 10 項目(除く、other)のみとなる。

表１　JEFFL における最頻度形容詞

形容詞	累積%(件数)
many	7.49(2,638)
happy	13.89(2,256)
much*	18.43(1,599)
good	22.81(1,542)
old	26.82(1,411)
interesting	30.15(1,174)
important	33.30(1,110)
sad	36.10(985)
big	38.76(938)
hard	41.42(936)
bad	43.82(847)
hungry	46.02(772)
other	48.19(766)
new	50.04(652)

(*much には副詞を含む)

②ICNALE の場合

ICNALE のサブコーパスには、英語母語話者（ENS）の作文データが含まれる。そこで、それらを日本人大学生(JPN)のデータと比較してみると、まず、品詞分布については二者間に大きな差はない（図-1-1、図 2-2)。形容詞は学習者、英語母語話者共に 18%で、他の品詞の割合もほぼ同程度であったことから、量的には大学生レベルでは、英語母語話者と大きく異なることはない。

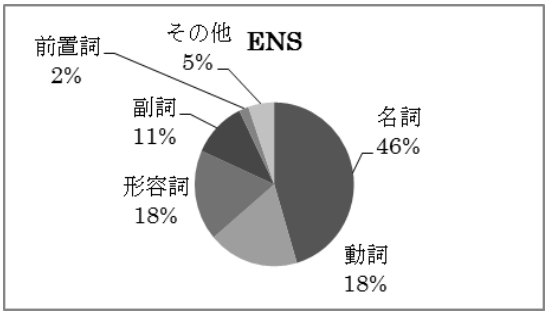

図 1-1　品詞分布：英語母語話者

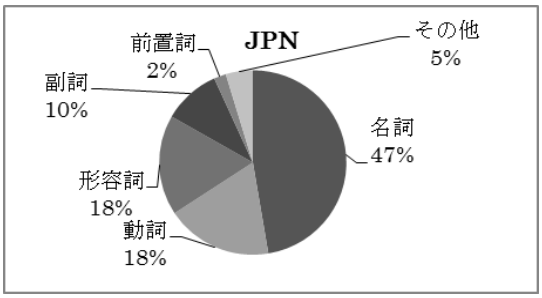

図 1-2 品詞分布：日本人大学生

ICNAL に出現する形容詞(タイプ 369｜トークン 8697)を見ると、形容詞は 12 項目で全体の 50%を超えている。なお、JEFLL Corpus と共通する形容詞項目は good と other のみである。ICNALE における英語母語話者データ（トークン 20284）の内、形容詞はタイプ 413｜トークン 2327)である。39 項目で 50%を占める。

(2)コーパス用例の質的分析：形容詞＋名詞

用例分析とインフォーマント調査を行ったところ、いくつかの典型的なタイプが観察された。形容詞-名詞型の名詞句、主部＋形容詞（補部）の構文、形容詞-前置詞等の機能語、副詞/形容詞-形容詞/副詞等の組み合わせであるが、ここでは形容詞＋名詞のコロケーションに注目する。また、意味とコロケーションの自然さ（native-likeliness）を基準として、1)形式・意味において自然な形容詞＋名詞の組み合わせ(正用)、2）意味疎通を阻害する誤った組み合わせ(エラー)、3）文法的に容認され、理解可能だが不自然な組み合わせ(異型)、が見られた。

(3) CEFR-J Wordlist における形容詞

CEFR-J Wordlist では、動詞の項目数がほぼ形容詞と同じで、形容詞項目（計 1494 CEFR レベル別内訳:A1 148/9.9%、A2 243/16.3%、B1 514/34.4、B2 589/39.4%)となっている。

(4)語想起課題の結果

形容詞の語想起課題を学習者にした。対象は、高学力群(n=21)と低学力群(n=55)の 2 群に同じ条件で形容詞想起課題を課した結果、２群の想起数の差は著しく、英語力によって想起できる語の数が大きい。なお、綴りと品詞のエラーの語も想起数に含まれているため、より厳格な基準を設定した場合は 2 群の差はさらに拡大する。特に、低学力群では品詞のエラーが著しい。

また、想起語を CEFR－J を基準にして見ると、共通点と違いが明らかになった。両群共にほとんどの形容詞が A レベルの語である。極めて限られた A レベルの語彙だけでは、自然なコロケーションを産出することは困難であろう。自由回答の記述欄から、この課題ではキュ―となる刺激がないため、想起が難しいという回答が 2 群から得られた。高学力群の内、想起数が著しく多い被験者では B レベルの形容詞が時間後半に想起される。

(5)コロケーション単位の分析：学習者と母語話者の比較検証

JEFLL Corpus 及び ICNAL の用例に出現する形容詞を中心語として 2 語連鎖を抽出し、さらに名詞を中心語として、2 語連鎖を抽出し、観察した。そして、大規模な英語母語話者コーパスである British National Corpus(BNC)を使って、そこに出現する高頻度の 2 語連鎖(形容詞＋名詞)と比較すると、第一に、それぞれの共起語のバリエーションが学習者と英語母語話者では大きく異なる。例えば、トピックに比較的依存しない形容詞の例として中心語を real とすると、JEFLL Corpus(頻度 52)、ICNALE JPN(頻度 68)、ICNALE ENS(頻度 72)、BNC(頻度 2096)に対して、共起語のバリエーションは、JEFLL Corpus が 22 タイプで、ICNALE JPN は 24 タイプ、ICNALE ENS では 32 タイプである。JEFLL Corpus と ICNALE JP では、有意な共起名詞(t 値 2.0 以上)は極めて少ない。一方、BNC では有意な共起語に限定すると BNC(34 タイプ)においてはバリエーションが見られた。また、一部の語(例 thing/things 訳語「こと」)を除き共起語の質に異なる。例えば、personal experience(s)というコロケーションでは、中心語を personal 共起語を experience とした場合も、共起語を personal に、experience を中心語とした場合も、高頻度で、共起性も高い。上記の例で分かるように学習者のコロケーションのレパートリーは少ない。自然なコロケーションの生成には語彙の少なさや語彙知識の偏狭さから困難であるようだ。

(6)まとめ

「非母語話者のコロケーションはなぜ不自然なコロケーションを産出するのか」という原因について検証することが本研究の課題である。学習者は、特定のコロケーションを過剰に使用するが、習得レベルが上がると母

語話者に近づく、語選択・語結合の際に、語レベルでL1を参照するが、L1影響はL2語彙の発達に連れ、減少する。

本研究では、学習者コーパスにおける形容詞とそれが含まれるコロケーションを収集し、その特徴を詳細に量的かつ質的に検証し、英語母語話者のコロケーションと比較した、その結果、学習者は、まずコロケーションを構成する単語単位の語彙知識が不十分であり、コロケーション産出に必要な知識が量も質も乏しく、自然なコロケーションを産出するには構成語それぞれのコロケーション知識が求められることが英語母語話者のコロケーション生成の様子から分かった。

日本人英語学習者、特に初級学習者では個々の単語単位の語彙が少なく、母語である日本語の訳語に依存しており、訳語を参照しながら、訳語と訳語の組み合わせで英語のコロケーションを生成しているのではないかと考えられる。自然なコロケーションを生成できるまでには、まず、「新たな語彙結合の典型となる L2 の語の連続体を蓄積する」(Pawley and Syder 1983)ことが課題であることが裏付けられた。今後の研究課題は、語彙の相互参照の能力が同様にコロケーション生成に影響をしているのかという問題について実験的手続きにより検証することが必要である。また、教育的示唆としては実践を通じて相互参照できる語彙・コロケーション知識を獲得する方法を考案し、実施することであり、その指導効果を検証することが今後の重要な課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

① 内田　富男、英作文コーパスにおける日本人大学生のエッセイに出現する形容詞の比較分析、2016、明星大学研究紀要人文学部、査読有、第52号、19-35 https://meisei.repo.nii.ac.jp

② 内田　富男、The JEFLL Corpusにおける語彙・意味の分析：Wmatrix3の適用と課題、2015、明星大学研究紀要人文学部、査読有、第51号,55-78 https://meisei.repo.nii.ac.jp

③ 内田　富男、コーパスと英語教育語彙表における基本色彩語の考察：BNC, JEFLL Corpus、CEFR(-J)を用いて、2014、明星大学研究紀要人文学部、査読有、第50号、19-32 https://meisei.repo.nii.ac.jp

〔学会発表〕（計１１件）

① UCHIDA T. Predicative Adjectives in Learner Corpora A case of able and possible by Japanese EFL learners、2015年 9月2015 ALAK International Conference, Chung-Ang University (Seoul)

② 内田　富男、英語教育語彙表における単語構成音素の分析と発音指導での利用可能性『CEFR-J Wordlist Aレベル発音編』の自作、2015年 8月22日、全国英語教育学会熊本研究大会、熊本学園大学（熊本）

③ 内田　富男、高校生はCEFR Level-Aの形容詞をどのように使うのか、2014年 8月24日 、関東甲信越英語教育学会千葉研究大会、明海大学（千葉）

④ 内田　富男、日本人中高生の形容詞語彙のレパトリーと CEFR-JWordlistの比較、2014年 8月9日、全国英語教育学会徳島研究大会、徳島大学（徳島）

⑤ 内田　富男、「学習支援型英語テスト」における語彙項目の検証：CEFR・EVP と日本人学習者の産出語彙の比較、2014年 8月29日、日本リメディアル教育学会、広島修道大学（広島）

⑥ 内田　富男、コーパス活用ワークショップ：JEFLL Corpusを２学期の授業に活かす、2014年7月25日、愛知教育大学（愛知）

⑦ 内田　富男、JEFLL Corpus に見られる基本色彩語の考察 ―色彩形容詞を中心にして―、2014年5月24日、英語コーパス学会東支部大会、成城大学（東京）

⑧ UCHIDA T. Problems of L2 Color Lexicon: Is that of EFL learners colorful or colorless?、2014 March、Second Asia Pacific Corpus Linguistics Conference(The Hong Kong Polytechnic University Hunghom, Kowloon(Hong Kong)

⑨ UCHIDA T. Salient Features of Collocations in Learner English: A Case of Japanese EFL Students、2014 March、CRPP Symposium on Applied Corpus linguistics & Education Research(National Institute of Education(NIE), Nanyang Technological University, (Singapore)

⑩ UCHIDA T. Problems of Word Combination in Learner English A Corpus-based Analysis of Adjective Noun Sequences Produced by Japanese Students, 2014 August 、 JACET 50 International Convention(Seinan-gakuin University、(Fukuoka)

⑪ UCHIDA T. Development of Two-Word Combinations by Japanese EFL Learners: Analyzing Parts-of -Speech and Lexical Items in the JEFLL Corpus 2014 April 、 International Conference on Applied Linguistics & Language Teaching(National Taiwan University of Science and Technology, Taipei

６．研究組織

(1)研究代表者

内田　富男(Uchida Tomio)
明星大学人文学部准教授
研究者番号：50513850